

Report

第 2 回 全国こども科学映像祭 表彰式と上映会



ゲスト講演 作家 畑 正憲氏

第2回「全国こども科学映像祭」は、平成15年6月、全国の中学校、それに小学生を家族に持つビデオ制作に熱心なお父さんお母さんや祖父母を対象に、作品募集をスタートした時に始まった。

正直なところ、事務局としては、昨年度に比べてどのくらい応募数が増えてくるのか、いささか不安をかかえての船出であった。

「サイエンスチャンネル」での募集PR、そして10月末の募集〆切を控えてではあったが、9月にはNHK3chが「ETVガイド」で映像祭の告知をしてくれた。

その結果、第1回目の22作品に対して、今回の応募数は34作品となり、12作品の増加であった。



「和ろうそく伝統のわざを探る～」

応募作品の上映時間数は、合計約240分、極めて慎重を期しての審査の時間が流れた。

特に小学生部門は、第1回目同様、小学生とその保護者の共同作業ということもあって、ほのぼのとした楽しい作品が多かった。

中学生部門は、ビデオ制作の技術というよりも、テーマを選ぶ際のアイデアとか、出演したスタッフのウィットとかに中学生らしさがあふれていた。

審査は、日本獣医畜産大学学長の池本卯典先生を審査委員長に、11人の審査員で熱心な討議が進められた。

まず、中学生部門では、優秀作品として5作品が選ばれ、更にその中から文部科学大臣賞が投票された。



「おもしろいアリジゴク」

文部科学大臣賞に選ばれた「和ろうそく～伝統のわざを探る～」は、そのテーマ性、表現力とも優れているとの意見が多く、各地に残っている“匠の技”の一つ、和ろうそくの秘密を、中学生の科学する眼で見事に捉えたもので、特にカメラワークや構成力には他を圧するものがあった。

小学生部門の文部科学大臣賞「おもしろいアリジゴク」は、祖父と小学校2年生の孫で、近くの林の中で見つけたアリジゴクの生態をじっくりと調べたもので、小学生伯人君のい



「美幸・幸也のカタツムリ日記」

きいきした観察ぶりが印象的であった。

優秀作品賞は、中学生部門2本と小学生部門4本が選ばれた。

中学生部門の「Happy Birth 空飛ぶめだちゃん」は、パソコンで作ったアニメーションをうまく取り入れた作品で、中学生の探究心を強く感じさせる作品に仕上がっていた。

“めだかが何故空を飛ぶのか”といった疑問をユーモアたっぷりの手法で描き、不思議な魅力を感じさせる作品になっていた。

同じく中学生部門の「未来を救う一人一人の力」はスタジオを使った作品で、身近な環境問題をテーマとして、オムニバス風にしっかりとまとめられていた。



「未来を救う一人一人の力」

小学生部門には4作品が選ばれた。「冬を越せない山綱川の外来魚」は、意外とも思える外来魚の生態を、実験を含めたいろいろな角度から探求した作品で、お父さんと二人の姉弟の努力の賜物である。

「美幸・幸也のカタツムリ日記」も、同様に兄妹と祖父の共同作品で、こどもたちのカタツムリを見るやさしい目に共感を覚えた。

「森の小さな水たまり」では、ふと目にとまった身近な小さな生きもの“オタマジャクシ”との触れ合いを通して、生命をいつくし

む思いやりの気持ちを感じ取ることができる作品になっている。

「コアシナガバチの観察」は、家の軒下に巣作りをするコアシナガバチの生態を、小学校6年生の悠季ちゃんと祖父とでじっくりと観察した作品。しだいに出来上がっていくハチの巣を極めて美しい映像でとらえているところが評価された。



「コアシナガバチの観察」

その他、佳作には、中学生部門2作品、小学生部門2作品がえらばれた。

また、今回初めて、中学生部門に「奨励賞」が2作品選ばれた。中でも「紙トンボの研究」は、コンピュータの時代を反映してパワーポイントを駆使した作品で、テーマは面白いが、動画が少ないので、次回の作品に期待しようということで奨励賞に決まった。また、「さいたま市立植竹中学校」には、ひとつの学校から複数の作品を熱心に応募して下さった努力に対して、今後の更なる努力に期待して奨励賞を贈ることにした。

表彰式の後、ムツゴロウ先生こと作家の畑正憲さんの講演があり、参加した小・中学生やその父母、祖父母たちに動物とのつきあいの醍醐味をユーモアたっぷりに語ってくれた。



ムツゴロウ先生を囲んでの記念撮影